

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.58

試 行 錯 誤



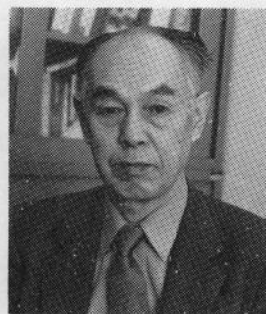
特集 NGOとしてのJVC

NGOの沿革と国際比較	2
ヨーロッパのNGO	8
進むべきか、進まざるべきか	10
JVC学習会	13
JVCアジバール病院での活動を終えて	14
私の会った日本在住「難民」第1回 —— 13歳を境に激変した私の人生	16
Dear, My Friend	18
JVCNEWS	20

NGOの沿革と国際比較

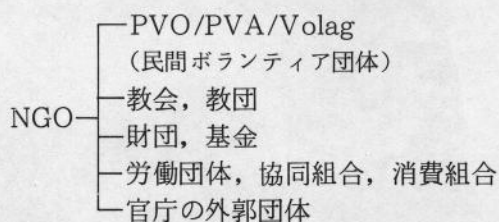
東和大学国際教育研究所 室 靖

NGO (Non-Governmental Organization)といわれても何のことやらチンプンカンプンの人もいるかもしれません。NGOの日本語の適訳はなく、(非政府間機構とか民間組織とかに訳されています) まだまだ日本では認知された存在ではありません。JVCの職員のように日々NGOにどっぷりつかっている者も、その実、よくわかっていないのです。そこで1月27日にNGO問題の権威であり、JVCの執行委員でもある東和大学の室教授に来ていただき、改めてNGOについて学習会を開きました。これはその時のテープを起こしたものです。



NGOの定義

まずはじめにNGOという用語について説明したいと思います。しばしばNGOとPVO (Private Voluntary Organization) またはPVA (Private Voluntary Agency) という言葉は互換性をもって使われています。タイで皆さんはVolagという言葉にぶつかったと思いますが。厳密にいいますとNGOの方が概念が少し広いわけです。PVO(PVA)というのは民間の自発的な組織です。これに対してNGOの中には、まず教会とか教団が含まれます。また財団、基金といわれているものとか、労働組合、協同組合、消費組合、日本では生活協同組合といわれるものも入ると思います。官庁の外郭団体というものもあります。これは若干ヨーロッパにはありますが、アメリカにはありません。余談になりますが中国にあるNGOというのは全部官庁の下請機関です。



NGOの沿革

草わけはキリスト教ミッション

今日は開発援助や緊急援助をしているNGO、— 最近ではNGDO (Non-Governmental Development Organization) といわれていますが — につ

いてお話ししたいと思います。

さてそのNGOとかNGDOの沿革というものを大急ぎで見えます。今日でいう開発協力といわれるものは、実はNGOが最初にやっていたのです。つまり、欧米のキリスト教のミッション (Mission = 伝道者) が今日でいう低開発地域とか植民地などに出かけて行って、福祉活動 — これには医療も入ります —、それから教育事業を行っていたわけです。日本でも外国のキリスト教団体が作った福祉施設や学校がありますが、そのように実はNGOの草わけはキリスト教ミッションが行った活動であるといっても間違いはないと思います。

ところがご承知のように第2次世界大戦が終わった後に — 特に1950年代に入ってから —、開発援助という思想、あるいは開発協力という思想が出てきて、それは政府の仕事であるという考え方が定着をしてきたわけです。いわゆる Official Development Assistance (政府開発援助)、略してODAといわれるものです。これにはもちろん国によって若干始まった時期にずれはありますが、だいたい1950年代にはそういうものが始まりました。日本でも1958年には始まっています。

再認識されたNGOの援助協力

それが1975年前後からなのですが、もう一度開発援助・協力におけるNGOの役割というものがあるように再認識されるようになりました。その結果OECD (Organization for Economic Cooperation and Development = 経済協力開発機構) — いわゆる先進24カ国政府間の機関ですが —、が1981年にOECD各

国のNGO(NGDO)の名簿などを作成したわけです。このことは、開発協力におけるNGOの役割を無視できなくなってきた1つの例証であろうと思います。またOECDは1980年に欧米の主要なNGOとの間で高級レベルの合同会議を開いたことがあります。この時NGO側のまとめ役をしたのがジュネーブにあるICVA(International Council for Voluntary Agencies)です。ICVAができたのは1962年で、初めのうちはNGOの間の横の連絡協議会とっていたのですが、1980年にはOECDの呼びかけでNGO界のまとめ役としてこの会議を共同で主催しております。そしてそのころから開発に関わりを持っている国連諸機関がNGOのための専門の部門とか委員会を作ったのです。なかでも世界銀行のNGO委員会は日本でもよく知られています。この委員会は今年で6回目の会議を開いたのですが、ここでもICVAがNGO側のまとめ役をしています。

それから国連機関はNGOに関わりを持つ部門とか人々がいます。ユネスコとかUNDP(United Nations Development Program = 国連開発計画)、FAO(United Nations Food and Agriculture Organization = 国連食糧農業機関)、UNHCR(United Nations High Commissioner for Refugees = 国連難民高等弁務官事務所)など、これらの連絡調整機関として国連自体のもとにNGLS(Non-Governmental Liaison Service = 対NGO渉外サービス)というものをつくりました。このNGLSが各国連機関のNGO関係の窓口になっています。NGLSは2つのオフィスを持っておりまして、1つはニューヨークの国連本部に、もう1つはジュネーブの国連事務所にあります。

AID AGENCY = 援助省

また欧米先進国には“Aid Agency”と呼ばれる開発援助専門の官庁があります。これらの官庁にはNGO課というものがあるのですが、日本にはそのような独立の援助官庁はありません。しいていえば外務省がまとめているともいえますが、通産省でも援助白書を出しているという現状です。

1番早く援助省を作ったのは西ドイツです。1962年です。英語に訳すとあまり適訳ではないのですが、Ministry of Economic Cooperation, 連邦援助省と呼んでいます。私も2度ほどここを訪問したのですが、このNGO課にはなんと29人のスタッフがいるのです。そして西ドイツのNGOを手分けして

連絡調整しています。それと同じようなことはどこにでもあるわけで、カナダにもCIDA(Canadian International Development Authority = カナダ国際開発庁)という役所がありますが、ここにもNGO課があります。オランダですとMinistry of Development Cooperation = 開発協力省です。このように援助省というものがないところはないのですが、日本では外務省にもNGO課どころか、1昨年の1月までNGO担当の職員さえいなかったのです。

それで私どもは1982年の秋に我々ボランティアグループがNGO調査をやって、その年にNGOの名簿を作りまして、外務省に持っていきました。そして当時の課長に会っていろいろ話をしたのですが、「こういうことは本来なら役所が自分でやらなければいけないのですが…」などといっていました。その時に「せめてNGOとの連絡をする人を置いて下さい」と言ったのですが、これは非常に素直に聞いてくれまして、1983年になってそういうポストを作りました。その時のポストは内部的なものだったのですが、今年度の新予算から正式に認められました。

これらのことは日本の政府というものがいかにNGOを軽視してきたか、あるいは事実上無視してきたかをよく表わしています。NGOに対する認識が日本は非常に希薄であると、残念ながらいろいろをえません。

政府開発援助を補うNGOの働き

先にお話ししたように1980年代になりますと、NGOというものが国際的に注目を集めるようになり、日本でも遅ればせながら最近注目されるようになってきたのですが、なぜそういうようになってきたのかといいますと、次のようなことがあげられます。

1970年代半ばごろからODA、つまり政府開発援助が第三世界諸国の底辺の民衆の絶対的貧困を解消することができないということがだんだんわかってきたということが1つです。その結果第三世界の、特に貧しい住民のBasic Human Needs(人間が生きるのに最少限必要なもの)の充足をまず重んじなければならぬという主張がそのころ出てきました。つまり開発援助においては底辺の民衆のBHNの充足を大事にしなければならぬという認識がますます強まってきたのです。それは別の言葉でいうと、経済開発あるいは成長を支えるようなものの形でのインフラストラクチャー(Infra-Structure = 基盤施設)を重視する開発援助協力にかわって、基礎教

〔表1〕 OECDの開発援助委員会(DAC)加盟17カ国の政府開発援助(ODA)実施額と開発途上諸国や多国籍開発諸機関への民間非営利諸団体(PVA)*の贈与額(1983、1984年)

(DAC報告書より)

	ODA(\$million)		ODA/GNP(%)		① grants by PVA (\$million)		② PVA grants/ODA(%)		備 考
	1983	1984	1983	1984	1983	1984	1983	1984	
オーストラリア	753	777	0.49	0.46	32	41	4.25	5.27	
オーストリア	158	181	0.24	0.28	12	13	7.59	7.18	
ベルギー	480	433	0.69	0.56	30	1	6.25	0.23	
カナダ	1,429	1,625	0.45	0.50	132	141	9.23	8.17	
デンマーク	395	444	0.73	0.85	13	12	3.29	2.70	
フィンランド	153	178	0.32	0.36	16	18	10.45	10.11	
フランス(1)	3,815	3,788	0.74	0.77	36	34	0.94	0.89	海外県・領土を含む数値
“(2)	2,501	2,552	0.48	0.52	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	海外県・領土を除く数値
西ドイツ	3,176	2,782	0.48	0.45	370	382	11.16	13.73	
イタリア	834	1,183	0.24	0.33	3	8	0.36	0.70	
日本	3,761	4,319	0.32	0.35	30	41	0.80	0.94	
オランダ	1,195	1,208	0.91	1.02	107	101	8.95	8.36	
ニュージーランド	63	59	0.28	0.25	7	7	11.47	11.86	
ノルウェイ	584	543	0.10	1.02	43	47	7.36	8.66	
スウェーデン	754	741	0.84	0.80	61	62	8.09	8.37	
スイス	320	286	0.31	0.33	48	50	15.00	17.48	
イギリス	1,610	1,418	0.35	0.33	83	140	5.17	8.87	
アメリカ	8,081	8,711	0.24	0.24	1,320	1,464	16.72	16.80	
DAC合計(平均)	27,560	28,586	0.36	0.36	2,344	2,563	8.53	8.93	

* PVA=NGO

育とか農村における保健衛生、あるいは医療サービスの充実とか福祉活動など経済開発ではない、社会開発を優先する協理理論、援助理論というものがある。国際的にだんだん強まってきたということがありました。実はこの社会開発という言葉ですが、日本の援助関係者は国際的に通用しているような意味で使っていません。日本では港とか橋とか道路などの物的インフラストラクチャーを“社会開発”と使っています。このように日本では用語が特別に使われることが非常に多くあります。

そこでBHNを充たそうという開発協力を第三世界の農村で展開するには、ODAには限界があることがわかってきました。またこれはよくいわれることですが、ODAというのはお役人が中心にやることなので、どうしても官僚主義にとらわれる。そうすると本当に必要な時にきばきと実施ができません。そして予算を消化するためにやるというような硬直したことになってしまうのです。そこでその弾力性のなさとか即応性のなさに対して批判が強まってきたわけです。緊急の事態の場合はどうしてもNGOの力では対応できないという認識が国際的にも高まってきました。それが1970年代の後半です。そして先ほどもいいましたように80年代に入るところから各援助省にNGO課ができたり、国連に総合的な連絡機関ができたり、また世界銀行にNGO委員会ができたり、OECDがNGOの調査をするようなことが行われるようになりました。これらの動きは、

開発協力を有効に進めるうえでNGOの主要性が認められるようになってきたことの反映です。

大規模なプロジェクトが多い日本の援助

OECDのDAC(Development Assistance Committee=開発援助委員会)に所属している17カ国でODAが何の援助に使われているかを統計にしてみました。ここではインフラストラクチャーという言葉は使わず、public utility(公益事業)という言葉を使っていますが、電力、道路、鉄道などに何%のODAが使われているかというものです。これを見ますと日本は圧倒的に多いわけです。プロジェクト援助の70%が使われています。これは日本がいかにも国際的な新しい援助の考え方についていっていないということを数字の上で表わしています。

しかしODAにとって都合がいいのは大規模なプロジェクトです。大規模ですと一度にたくさん資金を使うことができます。農村などで人づくりとか保健衛生、成人教育など本当にかゆいところに手が届くようなことにはODAは向いていないわけです。ODA関係の人に「なぜあなた方は農村開発などにもっと力を入れないのですか」と尋ねると「そういうことが大事なのはわかっています。でもそういう小さな援助を何百したところで、消化できる予算はしれたものなのです。それに時間ばかりかかって大へんです」といいます。ODAで巨大なダムや高速道路などの建設などをすれば、一度に何十億を使う

(表2) DAC加盟各国のNGOが開発・救援活動の
 目的で支出した資金源の一覧表(1983年) (DAC報告書より)

	NGOが民間から集めた資金		NGOに対する政府からの支出*	
	金額 (百万ドル)	対GNP比 (%)	金額 (百万ドル)	ODAのなかに 占める比 (%)
オーストラリア	32	0.02	18**	2.4
オーストリア	12	0.02	n.a.	n.a.
ベルギー	30	0.04	16	3.1
カナダ	132	0.04	125**	8.7
デンマーク	13	0.02	18	4.6
フィンランド	16	0.03	2	1.1
フランス	36	0.01	14**	0.4
西ドイツ	370	0.03	177	5.6
イタリア	3	0.01	n.a.	n.a.
日本	30	0.01	31	0.8
オランダ	107	0.08	111**	6.6
ニュージーランド	7	0.03	1	2.3
ノルウェー	43	0.08	29	4.1
スウェーデン	61	0.07	44	5.9
スイス	48	0.05	46	14.4
イギリス	83	0.02	11**	0.7
アメリカ	1,320	0.04	595**	7.4
C E C			81	5.8
DAC合計(平均)	2,344	0.03	1,281	4.8

* ほとんどの国では“co-financing”支出。

** その国の海外ボランティア派遣型NGOへの支出を含む。

ことができる。このようなしくみからODAでは低辺の民衆のBHNに焦点をあてた援助はできないような仕組みになっているわけです。BHN重視、人間重視の開発援助はNGOでなければいけないということなのです。他の先進援助諸国でNGO協力を重視しているのはそのためです。残念ながら日本はその点まだおくらせています。

NGOの国際比較

次に最近のNGOによる開発協力の現状がどうなっているのかを調べたのが表1です。これを見ますと、いかに日本のNGOが微力かがわかります。この表は左側がODAの実施額です。1984年の日本のODAの実施額は43億1900万ドルです。これはアメリカについて2番目の額です。日本について大きいのはフランスですが、これは(1)と(2)に分けられています。(1)は海外県や海外にある領土の開発費が入っています。ところがミットランが大統領になってから海外県のための支出はODAからはずそうということになり、まだ実施はされていませんが少なくとも、(1)と(2)を分けてレポートするようになりました。

最前線の4カ国

次の欄にはそれぞれのODAがGNPの中に占める比率が載っています。1984年を見ますと一番下の欄にありますように、DAC 17カ国平均ではGNPの

0.36%をODAに使っています。ODAの優等性は4カ国ありまして、オランダなどはGNPの1%以上をODAに使っています。額のわりに尊敬されているのがスウェーデンで0.8%、そしてデンマーク、ノルウェーです。これらは“最前線の4カ国”といわれています。1985年のデータは出ていませんが、もしデータが出たら日本のODAのGNP比はDACの平均を越えると思います。そのくらいODAの金額は日本では大きくなっています。

次の欄をみますとgrants by PVAとありますが、これはNGOが援助に使った贈与額です。1984年の実績では日本は4100万ドルです。1番少ないのがイタリアの800万ドルです。おもしろいことに、GNPに占めるODAの比率がきわめて低い(0.24%)アメリカでは実に14億ドルをNGOが使っています。この額をアメリカの市民が出しているのです。これはほとんどの国のODAの総額より多い数字です。アメリカではNGOといわずPVOといっていますが、この援助費が非常に多いわけです。次に多いのが西ドイツの3億8000万ドルです。西ドイツと豊かさがほぼ匹敵するフランスが3400万ドルです。これは非常に興味のある研究課題だと思っています。

微力な日本のNGO

1番右の欄ではPVA grantsをODAで割った数字が示してあります。これを見ますと一番大きいのはスイスです。その次はアメリカ、西ドイツ、ニュージーランドとなりますが、日本の数字を見て下さい。1984年で0.9%、つまり1%以下です。それに匹敵してNGOが弱いのはイタリアの0.7%です。フランスの(2)にn.a.とあるのは資料が出ていないか、意味がないかということですが、いずれにしても表1を見ていただくと日本ではいかにNGOの力が弱いかがわかります。ついでですが、日本の0.94というのはDACの平均値8.93の約1/10です。

次に表2を見て下さい。左側にNGOが集めた金額が、右側にそういうNGOに対する政府からの支出というものがあります。1番左側の数字は表1の①の数字と同じです。これを見て、国民レベルでNGOに比較的金を出しているのはオランダとノルウェー、それからスウェーデンです。そして民間から集める金額が少ないのがイタリアと日本です。どちらも0.01とありますが、表1を参考にして計算してみるとこんな数字にならないので、私が計算しなおしてみたところイタリアの場合、0.00086とな

りました。日本の場合は0.00255です。どちらも、0.01よりは0の方に近い数字です。表の上で0にするわけにもいかないということで、0.01にくり上げてあるわけです。

日本のODAは官庁の外郭団体へ

今ODA資金をNGOに供与することはないかという御質問がでしたが、表2の右側の欄にNGOに対しての政府からの支出額が載っております。その絶対額が左側にずっと並んでいるわけです。ODAの内何%がNGO支援のために拠出されているかというのが右側に出ているわけです。これを見ますと一番大きいのはスイスです。実にODAの14%がNGOに行っています。カナダが8.7%、アメリカが7.4%です。少ないのはフランス、日本、イギリスです。イギリスのNGOはかなり活発なのですが、イギリスの援助官庁である海外開発庁はNGOにはあまり金を出していないことがわかります。ここで注意していただきたいのは日本の数字です。ODAがNGOに出したのが3100万ドルとなっていますが、ほとんどは官庁の外郭団体への拠出なわけです。つまり外国のようにNGOの主体性を認めてODAで支援しようというのではないのですね。日本の場合はいわゆる官庁の外郭団体が数多くあり、そういう所に官庁の役人が出向したり、退職してから理事長になったりするわけです。そういう意味で日本の場合のこの数字は決してほかの国と同じ意味を持っていません。

注のところを見て下さい。*のco-financingの“co-”は共同という意味です。つまりNGOはこれだけお金を集めたのだから政府もそれに対して出しましょうという（共同資金）というものです。ところがこれが確立していないのは日本だけで、日本は政府から外郭団体に供与される補助金が主です。

**はその政府からの対NGO支出の中に、その国の代表的なボランティア派遣NGOへの支出が含まれていることを示しています。ごらんいただければわかりますが、アングロ・サクソン系の国が多く見受けられます。このことについて述べれば、ボランティア事業というものは元来は市民が自発的にやるものであって、政府がそういうことをするのはおかしいのではないかという考えがありまして、特にアングロ・サクソン系の国ではそうです。

なぜ日本のNGOは弱いのか

それでは最後にまとめたいと思いますが、表1,2を見ていただきますと、まぎれもなく日本の場合は、NGO界が弱いということがわかります。その理由としては、歴史的、社会的、文化的要因がいくつかあげられます。1つ決定的にいえることは日本の宗教界の非国際性です。関心が内側に向けられ、国境を越えることがありません。日本の仏教団体はだいたいそうです。それから神道は言葉の性質からいっても国内向きにならざるを得ない。問題はキリスト教ですが、日本の場合はキリスト教といえども関心は内側に向いています。これが日本の文化なのです。

Peopleは人民とか国民とかいろいろな言葉に訳されていますが、これが主権者であるという意味での民主主義の弱さ、逆にいえば“官主義”の強さということになります。つまり官と民が対等でないこと。日本の場合、官がいつも民の上にあるということがNGOが育たなかった大きな原因の1つだったと思います。これが2番目の理由です。

3番目は、明治以降国民の間に定着した西欧崇拜、裏を返せば非西欧世界や有色人種の世界への無関心ということ です。

4番目には日本全体がヨーロッパ諸国に比べて、比較的貧しかったことがあげられましょう。自分たちが豊かだと思えるようになったのはほんの10年ぐらいのことです。OECDの役人が「日本人の住んでいるのはウサギ小屋だ」とつい口をすべらせたとき、日本人がこのことばを深刻に受けとめたのが、よい例です。日本人が貧しかったのは事実です。よそのことをかえりみるゆとりはなかったということもある程度理解できないことはないのです。少なくとも比較的最近までは……。

それからこれは私の1つの独断的な解釈ですが、第二次世界大戦後の日本には非常に豊かな個人というのはいないという事情もあります。イギリス、フランス、オランダ、ドイツなどには〇〇家というような大金持ちがいて、そういうような人がNGOに金を出すわけです。日本の場合は金持ちというのは会社なのです。個人はあまり持っていない。それがNGOが金を集めにくくしています。その上このような寄付に対しての税制上の優遇処置もありません。日本の金持ちはロックフェラーとかフォードなどとは比べものにならないほど小さいのです。このことは外国の人が理解していないことだと思います。

質問から

Q 国連の中でNGOはどのような役割を果たしているのでしょうか。またカテゴリーI, IIとはどのようなものでしょうか。

A 国連諸機関がそれぞれのプログラムや事業を進めて行く場合、政府以外のいろいろな機関とも仲良くした方がいいというので国連がNGOを作りました。一般にNGOとは国連や国際機関に登録されたINGO (International Non-Governmental Organization=非政府間国際機構)のことをいいます。これは国連などへの貢献度に応じてカテゴリーI, II, ロスターと3つに分けられます。カテゴリーIに分類されるNGOは31あり、議題の提案ができるなどもっとも多くの諮問的権利を持っています。

Q JVCのような団体を指す場合、NGOとかPVA, PVOとかいえるわけですが、両者にはどのような違いがあるのですか。

A NGOは国連から生まれてきた用語であるのに対し、PVA, PVOにはもう少し内発的な意味あいがあるようです。

Q NGOには明確な規定があるのですか。障害者の団体とか財団とかみんなNGOですか。

A 民間団体でも利潤をあげることを目的としているものはNGOとはいいません。

Q 学校もNGOですか。

A 私立の場合はそういえます。

< 解 説 >

国連とNGO

国連とNGOの関係は諮問関係と協力関係の2つに分けられる。国連憲章に従って国連の機関としてNGOとの諮問関係があるのは社会経済理事会(ECOSOC)だけである。諮問取決めをする目的は2つあり、第1には国連がNGOの持つ特定分野での専門知識を利用できることである。また第2には、NGO側からは彼らが代表する市民の声を国連に反映させることである。

諮問関係というのは会議の傍聴、文書の提出、発言などを主な内容とする。国連活動との関連におけるその関心領域の広さ、専門分野での能力、知名度の順にECOSOC/NGOを3つに分け、カテゴリーI, カテゴリーII, 及びロスターとする。この場合のNGOは営利企業や政治団体、研究機関も含めた広い範囲とする。なおECOSOC以外の他の機関も、その設立決議や管理機関の手続き規則によってNGOと諮問関係を持っている。

NGOと協力関係を結んでいる国連機関の代表としてUNDPとUNHCRがある。UNDPが協力関係を結ぶNGOは、営利を目的とせず、非政治的であることとされている。またUNHCRは難民救援をしている250ものボランティア団体と特約している。そのほかにも人権通信、広報、民間集会などの分野で、国連とNGOは協力関係を結んでいる。(国連広報資料より)

ODA (Official Development Assistance
=政府開発援助)

発展途上国の経済社会開発に役立つ目的で行う資金と技術の援助で、2国間援助と国際機関への出資拠出とがある。これには贈与と貸付がある。

OECD (Organization for Economic Cooperation and Development =経済協力開発機構)

加盟国の協力によって経済の安定と貿易拡大に努め、さらに加盟各国による発展途上国援助の促進と調整をはかることを目的としている。加盟国は西側先進24カ国。

DAC (Development Assistance Committee
=開発援助委員会)

OECDの下部機関で、メンバーは米、英、仏、西独、伊、加、日、豪、スイス、スウェーデン、オーストリア、オランダ、ベルギー、ノルウェー、デンマーク、フィンランド、ニュージーランドとEC委員会と構成される。目的は発展途上国に対する加盟国の経済技術援助を調整し、促進することによって西側援助の共同態勢を固めることである。

ここでは加盟諸国共通の問題を討議したり、加盟諸国の援助政策及び援助実績の報告を求めて審査を行い、その結果を集計し、公表する等の活動を行っている。

ヨーロッパのNGO

小泉 順子

「アイディア ハウス」

欧米のNGOというと、「すごい！」というイメージが、まず、私たちの頭の中に浮かぶのではなからうか。確かにその歴史と経験の厚み、宗教を背景とした確固たる社会的基盤、あるいは政府のNGOに対する政策の差など、いくつもの理由によって、質・量ともに充実した活動を展開しているのであるが、私たちはこれをただ口をあけて仰いでいたのではしかなかった。ここではあえてイギリス、オランダにおける地域レベルの小規模なグループの活動を紹介したい。そこには、日本のNGOと共通する課題を抱えつつ、それを乗り越える道を模索する姿があり、単なる「すごい」にとどまらない私たちに示唆してくれる何かが見えてくるような気がする。

▶ サード・ワールド・ショップ(オランダ)

最近、日本でも第三世界のものを売る形での海外協力に関心を示す人が増えてきているようだが、オランダは人口約1400万人の小国ながら、200にのぼるサード・ワールド・ショップが存在している。サード・ワールド・ショップといっても、ある特定の輸入元の下にチェーン店化された店舗ではない。関心を持つ仲間でグループをつくり、輸入専門の別な団体と連絡をとりショップを始めるが、そのやり方については自由である。店を持つのか、自分の家の台所の一角を利用するのか、籠をかついてバザーや市場で売するのか、あるいは、扱う品物は既存の貿易体制への批判的色彩を強く出して、コーヒーや紅茶など一次産品に限るのか、人々の意識変革をめざし第三世界に関する本やミニコミ誌を中心にするのはまったくそのグループに任される。ただし関わる人はすべてボランティアである。主婦、学生、失業者が多い。

このように型にはまらず、しかも一人ででも関わられるやり方はサード・ワールド・ショップを誰にでも気軽に関われるものになっている。はじめにサード・ワールド・ショップに関わりを持ち、数年間経験を積んだ後、もっとラディカルな、時にはエコロジーなどほかの分野の活動に移ってゆく人も多い。人の動きが激しいのが悩みである。もちろん物を売り、少しだが差益を得る形は、グループに活動を維持す

る資金をもたらしてくれる。

しかし、オランダのサード・ワールド・ショップの一番基本的な目的は、低開発の構造的原因を人々に知らせ、不公正を助長する制度やグループと闘うことであり、そのための最も重要な機能はキャンペーンの拠点となることである。UNCTAD(国連貿易開発会議)で一次産品の価格低落が問題化したのを受け、1969年にショップ第一号が誕生して以来、まずは砂糖きびキャンペーン、そしてベトナム反戦、チリへの連帯、スリナム解放など、他のNGOと協力して全国レベルのキャンペーンを繰り広げてきた。1985年10月、私が訪問した際は、ニカラグア連帯委員会やNOVIB^(注1)と協同で、経済封鎖に苦しむニカラグアからバナナを輸入して売るキャンペーンの最中であった。地方都市の街角にも机を出してバナナを売る人々の姿があった。地方レベルでは、エコロジーや反核等のテーマでもキャンペーン委員会が実施されている。

こうしたキャンペーンの際、他の団体やショップ同士の間の連絡調整を行うのが全国サード・ワールド・ショップ連盟だ。また、連盟は、ショップの創設や活動に対してきめ細かなアドバイスを与える現場の活動者を抱えている。ショップづくりのための手引き書や、人々に第三世界の問題を伝えるための材料も豊富に工夫されている。

ただし、活動者の確保、グループの自主性と全国的キャンペーン活動の調整など課題が多いことも確かである。ショップを始める人のために第一のアドバイスは「しっかりした仲間をじっくり見つけること」だというのが、基本はどこでも同じかもしれない。



民芸品などを置いたサード・ワールド・ショップの内部

▶ スコットランドの開発教育

(SEAD-Scottish Education and Action for Development)

イギリスには、全国に約40カ所の開発教育センターがある。SEADもその1つであるが、その活動内容はピカイチと高く評価されている。

もちろん資料室を備え、開発の問題に関する資料の貸し出しも行っているが、SEADの活動の特徴は地域性を重視した研究・調査、社会教育に絞った開発教育、そしてSEADを資金的にも支えるキャンペーン活動にある。

スコットランドとアパルトヘイトが歴史的、経済的にどんな関係にあるのか明らかにした小冊子や、スコットランドに本社を持つある繊維関係の企業とインドとのかかわりを19世紀から現在まで追った本など、SEADの調査テーマはあくまでもスコットランドを切り口にしている。人々の関心をつかむのには、身近なテーマを選ぶ必要があるからだ。また、調査したものは、小さくてもよいから（その方が多くの人の手元に届きやすい）きちんと形に残り、他人が実績として評価できるものにして積みあげている。

このような少し言葉は悪いが戦略的ともいうべきアプローチは、他の活動にも共通している。例えば具体的なセミナーや連絡講座は、社会教育の分野に限り労働組合、女性のグループ、もっと細かく母子家庭のグループなど、アプローチする対象を絞っている。そしてその対象層の興味、関心と開発問題との接点を探り、テーマを決めてゆくのである。

他の開発教育センターで働くある女性も「私がまず行ったのは、対象としたい女性グループの所に出かけて行って彼女らの話を聞くことでした。そして彼女たちのニーズから生まれたのが、ことばを通しての自己表現というセミナーでした。このテーマも、実は開発の問題とつながっています」と語っていた。

SEADのキャンペーンは、全員が自分の収入の1%にあたる額の半分をSEADに、残りの半分をSEADが指定したスコットランドや海外の不正と闘うグループの中から1つ選んで寄付する形をとっている。現在実施中の女性のキャンペーンはシエラレオネの農村開発にとりくむ女性のグループとチリのウィメンズ・クリニック^(注2)、スコットランドの女性のかけてみ寺である。また700人をこえる会員の中から、近くの会員同士の集まりが生まれたり、地方紙の開発問題の扱いを監視して投書や手紙を送るグループ

が自発的に生まれている。ちなみに、40人が最初の5週間に出した60通の投書のうち、17通が掲載されたという。

▶ 第三世界と手をつなぐ

(OWL-One World Link)

リンクングやトウィニングというのは、1980年代の初めよりヨーロッパで盛んになってきた活動で、地域が時には自治体もまきこんで第三世界の地域とつながる形の友好、協力、連帯関係を指す。

OWLはイギリスのワーウィックシャー州とシエラレオネのボ地域との間に1981年に結ばれた地域同士のリンクである。ただし自治体レベルの公式な関係はない。現在までにワーウィックシャーの16の学校がボの学校と手を結び手紙の交換を行っているほか、図書館同士が関係したり、あるいは医師とロータリークラブが協力してボの病院に医薬品を送ったり、あるいはその地域の開発教育センターがボに関する教材を作ったり、イギリスに留学しているボ出身の学生と交歓会をもったりという形で地域の広い層の人々をまきこんで具体的な活動が続けられている。

もちろんこうした関係も簡単に生まれたわけではない。お互いの期待のずれを埋めつつ今日まで続いてきた背景には、アイディアが生まれた時から具体的に相手地域を選び、橋渡しする人を見つけ、時には1日中電話の前ですわり情報を集めて相手とねばり強く対話をしてきた何人かの個人の努力が存在している。

「単なる交流を目的としたリンクは保守的だ。相手をよく選ばず、権力者に学校を建てる名目で金を与えてしまうなどしろうとの協力活動にはおとし穴が多い」などという開発関係の専門家の批判を受けつつも、こうしたリンクの輪は広がってきている。それは人々が自分で考え、判断し、具体的に顔の見える関係で相手とつながることができる点を評価しているからである。そしてこのような活動は、今まで開発に関心を示さなかった人々を動かしつつある。

こうした可能性を持つリンクをよりよいものにしていくために、年一回全国的な経験交流集会在持たれるほか、全ヨーロッパレベルでも毎年、自治体と海外協力とリンクをテーマに会合がもたれ、失敗、成功、展望について正直な議論が行われている。

注1) オランダの民間による海外協力団体

注2) サンチアゴにある、母子保健のための教育センター

進むべきか、進まざるべきか

岩崎駿介(JVC代表)

先日、JVCの勉強会の一環として、本号にも掲載されている室靖氏のお話をお伺いした際、その内容に触発されて、二、三のことを申しあげたが、これがT/E編集部の耳にとまり、原稿としてまとめるよう依頼をうけた。そこで私としてはこの機会をとらえて、私がある場で申し上げたことのみではなく、今丁度、JVCの存在意義についての議論が6年間の活動をふまえて、いろいろな形で提出されようとしていることでもあり、私がいつもこの問題について考えていることをここに述べて、参考にしていただきたいと思う。

● NGOとミッション活動

室さんのお話から一つ抽出できることは、JVCを含む世界各国のNGO(Non-Governmental Organization)の活動や組織は、西欧社会を中心とするキリスト教ミッション(Mission=伝導者)から発生したものであり、したがって次のような図式が成立するのではないかということである。つまり、16世紀から始まるアフリカ奴隷貿易や、それ以後から20世紀前半にいたる西欧諸国による植民地統治と同時並行的におこなわれたミッションの役割と、現代の先進国による第三世界に対する開発援助と同時並行的に活動がおこなわれているNGOの役割は酷似し、その限界性は共通しているのではないかという指摘である。ミッションにおける活動は教育の普及など一定の肯定的役割を果たしたものの、その基本的動機はキリスト教的慈善主義によって人の窮状を救済するというより、「人は神とその仲立ちとしてのキリストに帰依しなければ人にあらず」という、きわめて独善的価値指向にしたがって活動が展開されていたと考えられる。そしてさらに、植民地政策そのものも「布教のため」という理由づけによってなかば正当化され、結果的に第三世界の数多くの富と労働とを奪う結果になったのではないかと考え

られる。そして、これと同じような関係が、現代の先進諸国の開発援助という枠組みとNGOの活動との組み合わせに見られるのではないか。つまり「開発援助」という枠組みを通して先進国側が利益を得、いわばその反対給付や免罪符としてNGOのいわゆる「人道的活動」が保証されているのではないかという指摘である。

私は、この指摘に対して、まず何より「この指摘は正しいだろう」と答えざるをえない。しかし問題はその次である。それでは、「われわれに何ができるのか」ということである。そしてそれがかつてのミッションがそうであったように、単なる自己満足ではなく対象に対して何ができるのかをはっきりさせなければならない。

● JVCの矛盾

確かに、われわれJVCの活動は矛盾に満ちたものである。JVCの活動は、国連(主としてUNHCR)の依託を受けて行われる活動が、その活動比率の多くを占めているので、現在の国際政治の力関係をそのまま反映した「国連の存在意義」という範囲内で、正当化されうるものであろう。難民の、あるいは飢餓の現場において、人の命を救うことはできる。これは国連による依託の仕事ではないが、エチオピアから一年間の活動を終えて帰国した福村州馬氏は、「JVCの病院で、昨年2月の開設から1月終りの閉鎖までのほぼ1年間に、509人の人々が病院でなくなった。死体を数え、処理するのが日課であった。しかし確信をもって言えることは、509人の死者以上の数多くの人の命を救うことができたということである」と、オフィス・ミーティングで報告した。

われわれは確かに何ごとかをなす。しかしいうまでもなく一般的に、国連とて各国間の根源的矛盾を解決することは出来ない。

また、JVCの活動資金について考えてみれば、たとえ小学生が大切に貯金したお金を寄付していただいたものであろうと、あるいは第三世界の窮状に心から同情した市民からの寄付であろうと、基本的には現代の国際的経済システムの中で、日本が生みだしえる余剰をもとに、JVCの活動が保証されているのであり、日本がその富を得てゆく過程で、第三世界の政治的なき人々を虐げる結果になってはいないだろうかと懸念を拭い去ることはできない。



したがって皮肉なことに、世界各地の中で難民救援活動が必要とされる現場は、かならず西側に属する南の国と、その隣に位置する東側に属する南の国との接点にある。つまり東西両陣営の先進諸国が自国の経済的利益を擁護しようとして仕組む政治的・軍事的枠組みのもっとも弱い部分で、常に戦火や難民が発生するのである。ベトナム・ラオス・カンブチアのインドシナ三国、ソマリア/エチオピアの国境、イラン/イラク戦争、アフガニスタンなど、いずれも東西対立の接点になっており、戦火や難民の発生に日本を含む先進国自身がいかに重大な責務を負っているかを理解することができる。いってみればわれわれは、自らの経済的利益を維持するについて、必然的な代償を難民救援という行為によって支払っているという、悪魔的図式となっている。

さらにまた、われわれのいまだ解決しえない、活動の矛盾は日常的な現場においても見られる。長くタイ/カンブチア国境のノンチャン村で、補助給食プロジェクトを続けていた浜野敏子さんがいみじくも指摘したように(T/E 55号参照)、「人々の自立を助けると銘うっておこなわれる援助活動そのものが、人々の自立そのものを気持ちの上で、精神的な意味で奪ってしまうのではないだろうか」という指摘や、あるいはまた、われわれの側にあっても「活動する現場が、日本人にとっては一つの意識変革の場として、あるいはクメールの人々との繋がり合える場としてのチャンス」というより、「援助に関する一種の技術者集団の場に成り下がってしまっていないだろうか。そしてもっと深く突っ込んで話し合える関係をどのように作りだせるか」という疑問や矛盾も、われわれはいまだ十分に解決することができない。

たしかに 509人以上の人命は助かった…… ©野中章弘

あるいはまた、今年からエチオピアにおいて取り組もうとしている総合的農村復興プロジェクトの場合のように、相手国政府によるNGOに対する締めつけが強く、本来は市民的連帯のもとで環境改善をはかってゆくことが最も望ましいにかかわらず、連帯よりも物、友情よりも金を要求してくる政府を対象として、困難な交渉をせねばならないのも、われわれの活動が常に肯定的結果を生み出すとは限らない、証左の事例といえよう。

私は以前から、このような状況の中で最も大切なことは、日々の活動を通して「友達になること」であると訴えかけ、これ以外に道はないと主張してきた。しかしこれとても現場の厳しい状況にあっては、偽善的響きしか持ちえないことが多い。同じく浜野敏子さんが帰国報告会で述べたように、「国境のノンチャン村ではベトナム軍の進攻があるとき、その緊急度に応じて避難命令がでます。しかし逃げることができるのは、そこで働くNGO組織のボランティアだけであって、彼等カンブチアの人々は逃げることはできないのです。彼等は状況を、静かにたんと受け入れるしかありません」という場面において、それまで友人としてかかわってゆくのだと自負し、あたかも状況を共有していると確信していたのにもかかわらず、自分達だけが逃げ出すことによって、その友情さえも突如として欺まんなのだということを悟らざるをえない。したがって、こちら側の連帯に対する思い入れにかかわらず、彼等は、われわれを「一時的な善意の集団」として位置づけ、連帯や友情をとりわけ強く感じているわけではなさそうである。

● われわれの条件：自然と第三世界

問題は、このような八方塞がりの中で、何ができるかが問われているのである。JVCをはじめとする現代NGOの活動はいろいろな矛盾を含みながらも、それを乗り越えて何ができるかが問われているのである。私はこのような状況のなかで、次の方向を模索したいと考えている。それはひとことで言えば「深く地域に根差し、広く世界に結ぶ」という方向である。

現在、われわれが日本で生きてゆくについては、次の二つの条件が必要であると思われる。そのひとつは緑、環境、資源、エネルギーという、究極的にはこの地球という「自然」であり、もうひとつはわれわれの現在の富を根底において支えている「第三世界」である。したがって、現在のわれわれにとっての問題は、この「自然」をいかに大切にすることができるかということと、目に見えない形でわれわれの生活と密接に結びついている「第三世界」の人人を虐げることなく、われわれの生命をいかに維持できるかという問題である。

われわれの生存の基盤は広域的、国際的に拡大、拡散したにかかわらず、われわれが生きていることについての意味の自覚は相変わらず、ごく狭い地理的な範囲、空間的範囲に押し止められている。われわれの毎日食べるもの、着ているもの、住んでいる家の素材などは遠い国からやって来るにもかかわらず、そのものが遠い国々で作られる過程や、それを作り出す人々の生活や喜びや悲しみといったものには、まったく気付くことができない。私はいつも、このようなわれわれの生命を支えている物理的条件の空間的スケールとわれわれの生きている意味についての自覚を支える空間的スケールとの大きさのズレを、「生存と実存のズレ」、あるいは「物質と精神」、または「身体と心のズレ」と表現している。

われわれが、もし毎日第三世界の人々を虐げる生活をしているとしたら、そのことは第三世界の人々にとって問題なのではなく、まさにわれわれの心と身体とが分離してしまうことにおいて、われわれの問題なのである。第三世界の人々とかかわろうとすることは、第三世界の人々がかわいそうだからではなく、われわれの心と身体とのバランスをもう一度取り戻そうとするからである。

ここで、この心と身体との空間的分離につき、もう少し詳しく見てみたい。現代日本のいかなる地域

に住む人々も、みずからの生活を維持するためには、次の5つのものが自分の住んでいる街から他の街へ、また他の街から自分の街やさらに他の街へと移動していなければならない。その5つのものとは、「人」、「物」、「情報」、「エネルギー」そして「廃棄物」の5つである。「人」は通勤、通学、出張、単身赴任や引っ越し、あるいは海外旅行など、労働力としてあるいは他者との接触を求めて移動する。「物」は原資材、生産物、食料あるいは形をかえて資本として地域間を移動する。「情報」は事実情報としての情報もあるが、技術、認識の仕方、価値体系、宗教や哲学、さらに参加や投票という形での情報の移動がある。さらに、これら人、物、情報、廃棄物を動かす動力であり、かつまた物の生産過程の諸段階において必要とされる「エネルギー」があり、現代社会においてはそのほとんどをまかなっている石油を地域から地域へと運ばねばならない。そして最後に、人、物、情報、エネルギーの利用のあとの残りかすとしての「廃棄物」は、利用のあと地域に還元、堆積される場合もあるが多くの場合、他地域に運ばれ、遠く薄くされることによってわれわれの目の前から消去されている。

繰り返すことになるが、われわれの生活が支えられているのは、この5つのものが地域から地域へと、広域的、国際的に移動するからである。したがって、このようにして、この5つのものを通して、例えば日本の「ある地域」はそのネット・ワークの対極において「第三世界」と結ばれ、かつ地球全体の「自然」に対峙しているのである。われわれが日本においてバナナ一本食べる軽さとフィリピンでその一本を作り出す人々の重さとは、表裏一体をなしているのであり、さらにまた、これら動くものの距離があまりにも遠く、われわれの日常的感觉では知覚しがたいが故に、結局は自然を破壊し、大気、水、土壌を汚してはいないかが問題なのである。このような状況下において、私が今後の方向として「深く地域に根差し、広く世界に結ぶ」ということは、具体的には「物」、「エネルギー」そして「廃棄物」の3つの流れや循環をできるだけ小さい空間的スケールに縮小し、地域自立性をめざすことと、「人」と「情報」の流れについては、これをできるだけ広げることによって、人々の知覚・認識のスケールを拡大することを意図している。そうすることによって、われわれの生存と実存、身体と心のバランスを取り戻

すことができ、かつ自然と第三世界に対する負荷を小さくすることができるのである。

● JVC の今後の方向

それでは、今迄述べてきたような枠組みにおいて、JVC の意味や役割とはたして何であろうか。

それはまず第一に、日本の地域と海外の地域とを結び、日本の地域の人々にとっての知覚や認識のスケールを広げることに役立つことである。つまり「広く世界に結ぶ」ことに役立つことである。そのためにはもとより、われわれの海外での経験の内容をできるだけ正確に持ち帰ると同時に、日本の地域団体やグループと緊密に結ぶ努力をしなければならない。

第二に、対象である第三世界の人々に対して何らかの具体的、日常的な手助けを担い、かつ彼等の知覚と認識を広げるのに役立つことである。この意味で、JVC の仕事は、難民救援の仕事であり、もうひとつは第三世界の人々と連帯して彼等の生活改善に取り組む仕事である。このことは実に難しい仕事

である。価値の押しつけをしてはならないし、彼等内部に格差を作りだしてはならない。彼等と共に、それぞれの状況に応じたまったく新しい工夫を生み出す創造性が要求される。

そして第三に、少なくともこの運動に参加する人々にとっては、自分の心と身体とを一致させることができ、失われた自己を取り戻すこと可能性があることである。

したがって以上のように、JVC の仕事は状況変革の中心的役割を担うものではない。変革の中核は国内的にも、国際的にもあくまでより具体的な地域にあり、地域の変革のみが具体的で総体的な変化につながってゆく。その意味では、JVC の仕事は変革を補足する支援的運動の一つである。したがって、その意味でも JVC は、「深く地域に根差す」方向への努力、あるいは「深く地域に根差し」ている地域の人々と手を結ぶ努力を、けっして怠ってはならないと思う。

JVC 学習会

JVC 東京オフィスでは、月一回の学習会を開き、「環境・自然」、「第三世界」、「技術」、「地域」などのテーマについて、勉強していきたいと考えています。以下の文献は、先の「進むべきか、進まざるべきか」を岩崎さんが書くについて参照されたものですが、今後の学習会においても参考になると思い、ここに掲載します。なお、学習会についての詳細は、追ってお知らせします。(編集部)

緑・環境・資源・エネルギー・地球	円	生物からみた世界	ユキユスキュル	思索社	2400
成長の限界	ローマクラブ	近代知の反転:			
収奪された地球	H・グルール	マルクス主義への告別	北沢方邦	新評論	1800
砂漠化する地球	清水正元	人間が住むことの			
蝕まれる地球	石 弘之	本質的な意味	アリヤラトネ「エコノミスト, 60 2/8」		
蝕まれる森林	石 弘之	いま民衆の科学技術を			
第三世界・南北問題		問う	フォーラム, 人類の希望編	新評論	1700
軍縮の政治学	坂本義和	オールターニティブ・			
貧困: 21世紀の地球	西川 潤	テクノロジー	D・ディクソン	時事通信社	1300
南北問題	西川 潤	危機の科学	高木仁三朗	朝日選書	720
なぜ世界の半分が		イメージの誕生	中沢和子	NHK ブックス	700
飢えるのか	S・ジョージ	森林の思考・砂漠の思考	鈴木秀夫	NHK ブックス	700
飢えの構造: 近代と		地域・農業・回復への戦略			
非ヨーロッパ世界	西川 潤	いのちと農の原理	玉野井芳朗他編	学陽書房	1800
南進の系	矢野 暢	風土の経済学	玉城 哲	新評論	2200
アジアの開発と民衆	隅谷三喜男	水土の経済学	室田 武	紀伊国屋書店	1700
東南アジア世界の構図	矢野 暢	アジア農村の			
パナナと日本人	鶴見良行	ダイナミックス	中村尚司	YMCA	500
価値の体系・科学・技術		農的なくらし, 工業的			
人類の希望	I・イリイチ	なくらし	槌田 劭	樹心社	1500
人間復興の経済	ジュマッハー	いま, むらは大ゆれ	山下惣一	ダイヤモンド社	980

JVCアジバール病院での活動を終えて

—— 福村州馬氏インタビュー



エチオピアの緊急事態も一応去り、救援に加わっていた各団体もそれぞれ撤収した。ウォロ州のアジバールで開いていたJVCの病院も1月18日をもって閉じ、日本人スタッフも2月初旬相ついで帰国した。昨年2月から11カ月間このプロジェクトを担当していた福村州馬さんにエチオピアのこと、プロジェクトのことなどを聞いてみた。福村さんはJVC草創期からのメンバーでご存事の方も多いと思う。

— 福村さんは1980年から4年間、タイ・バンコク市内のクロントイスラムで、活動されたのですが、今回のエチオピアの緊急救援は、今までとずいぶん勝手が違ったのではないかと思います。まず、エチオピアに行かれた動機から聞かせて下さい。

実は、プロジェクトが実際に開始される直前(85年1月)ぐらいまでは、全く行くつもりはなかったのです。「飢餓救援ブーム」に巻き込まれるのもいやだったし。

しかし、JVCのエチオピア・ソマリアキャンペーンに少し関わる事になり、資料を読むうちに興味が出てきた事と、当時、エチオピアJVCでは、人材が足りず、大変であったという事から、行こうという気になったのです。今までと違った事を学べるとも思いました。スラムの活動よりある面で気楽にやれるのではないかと考えました。

— スラムでの活動より気楽といいますと。

緊急救援は、物量作戦といいますか、モノを持ち込む事に対する抵抗を自分の中で余り感じなくてすみます。スラムの場合ですと、なるべくモノはもちこまず、同じ立場に立ってやっていこうとします。地域住民との関わりに悩むこともあります。

緊急救援では、そのような事に思い悩む事はないだろうと思ったのです。緊急だからという事で、若干の功罪にも目をつぶれるのでは、という感じを持っていました。

— スラムで経験された貧しさと、エチオピアの貧しさは違うと思いますか？

今回、多少なりとも見たのは農民の貧困であり、

以前に働いていたスラムのは、都市貧民の貧困です。都市のスラムは、物質的豊かさと、文字通り隣りあわせですから、住民の貧困感も強いのですが、農村では、自分も貧しく、まわりも貧しいので、貧困感には、余りないと思います。相対的に見るとアジバール周辺の人達の方が、干ばつや飢えに襲われている事もある、相当、貧しいという印象はありますが、タイとエチオピアという国による違いはないと思います。

潜在的飢え、病い、貧困の問題を抱えていた農民達が、3年、4年と続く干ばつの中で、ジリジリと真綿で首をしめられた結果が、今回のエチオピアの惨事なのではないでしょうか。

— 昨年の5月には、1カ月に119人もの人々が病院で亡くなられたそうですが、そのような時、何を感じ、また考えられましたか。

実はその頃、仕事が一番忙しい時で、じっくり考える余裕はありませんでした。

しかし、朝病院に行くとき、一番先に死体安置所に行き、何人の人が前日から朝にかけて死んだのか数えるのが日課でした。

「ああ、やっぱりこの人はだめだったか」というような淡々とした思いです。しかし、肉親の死に直面して、泣き叫ぶ人や、あるいは打ちひしがれている人を見るにつけ、一人一人の死が、その肉親にとっては、恐ろしく重いものであるという事を実感せざるを得ませんでした。

— アジバールの病院は、もう完全に閉鎖されたのですか。

はい、1月18日に閉鎖しました。今では建物の一部を倉庫にしています。食糧や医薬品を保管し、また緊急事態が起きるような事があれば、すぐ対処できるようにしてきました。

— 入院していた患者さんやスタッフの人々は、どうなったのですか。

30人余りの在院患者は、継続入院治療の必要な1人を除いて、全員が各々の出身地に一番近いクリニック(政府運営)で、引き続き治療を受けられるよう

にしました。残った1人は、子供で孤児なのですが、250キロぐらい離れた別のNGOの病院で、引き取ってくれました。エチオピア人スタッフについては、次に予定している植林・農業などからなる復興プロジェクトでも活動してもらおう3人を除き、全員解雇しました。

— それでは、復興プロジェクトについては、どう思いますか。

私たちが、医療活動をしていた地域では、一応、緊急事態を脱したという時期ですが、これから再起に向けて、彼らが自立できるような状態をつくる作業が望まれています。種子や農耕の機具だけでなくあらゆる物が不足していますが、物資援助だけでなく、干ばつの原因の一つと考えられる森林破壊に歯止めや再生を狙う復興プロジェクトには意味があると思います。

— アジバールで一番印象に残ったことは何ですか。

難しいですね。印象的といえるかどうかわかりませんが、去年の10月から12月にかけて、徴兵と再定住という二つの出来事を目撃しました。

徴兵にせよ、再定住にせよ、各農業協同組合レベルにまで、何名という割当てがきて、その割当てを満すために、農民が無理やり引っぱられていくのです。その過程でワイロを使って、難を逃がれたというケースもありましたが、いずれにせよ、大多数の人達が政治の前に無力です。

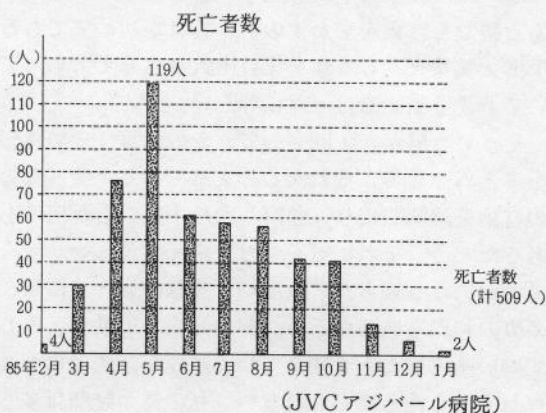
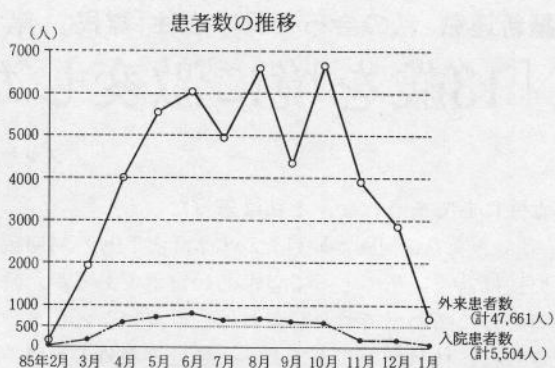
物質的豊かさとは無縁で、干ばつや飢えに悩まされている一番弱い貧農の人達が抵抗もできず、政治によって、運命や、時には生命のゆく末さえも、左右される姿をまざまざと見たという思いがします。

— どうして、エチオピア政府は、そのように強引に再定住を推し進めようとするのでしょうか。

アジバールのあるワレヒメノ郡の党書記長は、「土地は人口を養っていけるほど肥えてはいず、強制的に移動させない事には、農民は動かず、餓死を待つだけだ。こうする方が、よほど人道的なのだ」と言います。これとは別に、移住先の畑で、今、耕作をしないと次回の収穫に間に合わないの、政府は急いでいるのだとも聞いた事があります。

いずれにせよ、どの程度、土地が疲弊しているのかも判らず、私達が代案も出せないのは、残念です。— 福村さんは個人的には、今後どのような事をやりたいですか。

僕としては、やはりアジアの開発協力に関わりたいと思っています。特に日本と経済や歴史、或



いは文化、人種的につながりの強い地域を考えていますが、具体的にいえば、ビルマ^{ミャンマー}東部の国とネパール、ブータンなどです。

— 6月頃、フィリピンに行かれるそうですね。

ええ、それは勉強のためですが。僕はタイのスラムで活動していて、壁にぶつかってしまったのです。僕はまったくドブネズミのように、動きまわって、壁にぶつかっては、方向を変える。そんな事をくり返していたのです。

ですから、一つ一つの活動が、どういう影響を与えるのかもわからなかったし、一言でいうと展望が見えない。一步下がって、鳥瞰図的に全体を見渡したいと思いました。理論的に整理したいと。

まあ援助を学ぶという事であれば、イギリスなどの方が、伝統もあるし、いいのかもしれないけれど、僕としては、現場に近く、僕の印象としては、NGOもがんばっているフィリピンに非常に興味があります。もっとも、受け入れ先の学校が、僕を受け入れてくれたら話ですが。

現在福村さんは、バンコクオフィスとクロントイスラムの活動を手伝うため、2カ月ほどの予定でタイに行っている。

「13歳を境に激変した私の人生」

クット・ソワッタラさん(24歳・カンブチア)

A.G記

女性にもてそうだな、と私は思った

「できれば続けたいわね」とT/EのMM編集長は言う。私にとっては嬉しい言葉であるが、読者の方に断わっておかなければいけないことがある。それは、私自身のことである。私は“海外の現場”にも“国内の現場”にも立ったことがない。難民の方と親しく言葉を交わすのも、これが初めてである。T/Eの編集部には2年あまり出入りさせてもらっていても、予備知識はゼロに等しい。

そういう男が、1回会って、その言葉、その感想をまとめたもの、それがこの文章である。会った方の言葉を誤解したり、曲解したりすることが何度もあるだろう。それに気をつけて読んでほしい。

ただ、こういった“危ない”文章の書き方にも、多少の利点もあるだろう。何も知らない私が、少しずついろんなことを知っていく過程を、読者にも共有してもらえらるかもしれない。私の持つ疑問は多くの人のそれと同じであるだろうから。

さて、長すぎる前書きはこのくらいにして、本題に入ろう。同行してくれた、JVCの日本語家庭教師KMさんと私が、クット・ソワッタラさんに会ったのは、2月中旬の日曜日、午後8時だった。待ち合わせた、地下鉄・西馬込駅の出口には、冷たい風が吹きつけていた。京浜工業地帯のはずれに近く、だだっぴろい道路も、日曜のその時間には、車の数は多くなかった。夜間中学に通うクットさんに多少でも余裕があるのは日曜日だけだが、その日は工場で働き、せっかくの休日の昼間はつぶれていた。

クットさんは24歳、身長は170cmを少し切るぐらい。がっしりした体つきにセーターがよく似合い、目鼻立ちがはっきりしていた。女の子にもてそうだな、そんな不謹慎な第一印象を、私はもった。

幸福だった8人兄弟のうち、上の5人は死んだ

1962年9月1日、8人兄弟の7番目として、クットさんはプノンペンで生まれた。父は森林を管理する高級公務員で、かなり恵まれた生活を送っていた。家では何人もの人を使い、当時のカンブチアで超貴重品の自家用車もあったという。

3人の兄のうち2人はプノンペン大学に通い、そ

れぞれ経済と医学を学んでおり、クットさん自身も高等学校に通っていた。大学まで進学するのは、20人に1人もいない、そんなころの話である。

将来は医学か経済学を修めたいと思い、友だちと遊ぶよりは1人勉強することを好むクットさんの運命が急転したのは、1975年、13歳のときである。

当時、一家が住んでいたシェムリエップ県、シェムリエップ市に、ポル・ポト軍が入ってきた。ポル・ポト軍は町中の人に町から出るように命じた。クットさんは家族と同行する時、父母に内緒で磁石を持っていた。イザというときは、タイに逃げようと思ったからだという。(当時のカンブチアは義務教育が小学校6年、中学がなく高校が6年、大学が4年、という学制で、クットさんは高校2年であった)

郊外でおびえている人々の上に、マイクの呼びかけがあった。「公務員の皆さん、新しいオフィスがあります。あなた方の力が必要です」協力するために出ていった人々はすべて殺され、2度ともどってこなかった。そのなかにクットさんの父もいた。

プノンペンにいた兄3人と姉1人、マトモにいた姉1人の計5人の行方も分からなくなった。ポル・ポトは学生を憎んでいたし、10年たって政権が変わったいまも、なんの連絡もないのだから、たぶん生きてはいないだろう、とクットさんは言う。特権階級の子弟であったクットさんが生きのびられたのは、ベトナムとの戦争のため、あまり国民を減らしたくなかったからだろう、とクットさんは推測している。

「もし逃げなかったら、生まれた意味がない」

「何もなかった、意味はなかった」と、クットさんはポル・ポト時代の4年間を言う。田舎での農作業、まったく機械なしのダム作り…。合い間をぬって、魚を取り、野草を摘み…。生活するだけで、せいっぱいだった。もちろん、学校生活などなかった。

やがて、ポル・ポトは破れ、ヘン・サムリンの時代になった。クットさんがシェムリエップの町へ帰る途中の国道で見たものは、ベトナム軍の行列だった。ポル・ポトを倒したのはカンブチアの軍隊ではなく、ベトナムの軍隊であったことを知ったとき、タイに逃れることをはっきり覚悟したという。

同行してくれたKMさんが教えてくれる。「タイでもカンブチアでもラオスでも、ベトナム人の評判はあまりよくないよね」

クットさんはタイに向かう決意をしたころのことを次のように話している。

「もう逃げようと決めました。どんな道、どんなむずかしいことがあっても、逃げます。逃げたとき、お母さんとお姉さん知らなかったんです。でも、1カ月前、話しました。みんなつれていきたい、でもむずかしい。死ぬかな、タイに行けるかな、わからない。私、男だからだいじょうぶ。死んでもいい。もし逃げなかったら、生きる意味ない。生まれた意味がないから…」

母親はやはり止めた、とクットさんは言う。しかし、それをふり切って脱出した。今はその母親との連絡もとれる。頭痛に悩む母親に日本の薬を送りたいと思っているが、合法的に送る方法はない。

国境を越すにもお金がかかる

シムリエップ市からタイまで、車で行けばわずか半日の距離である。しかし、クットさんは3年もかかったという。

クットさんはシムリエップから北に逃げ、タイとカンブチア国境に連なる山脈に登り、何日か歩いて国境線までたどりついた。しかし、国境のカンブチア側にはいくつもの難民村があり、反ヘン・サムリン3派のゲリラ基地にもなっていた。食糧は赤十字などいろんな団体が支給してくれたが、そこはカンブチアであってタイではない。タイ語の話せないクットさんにとって自由の天地へ脱出するには、国境のタイ側にある難民キャンプに入らなければならなかった。しかし、キャンプのまわりはタイ軍が警備しており、近づくものは捕えられ、強制送還されるか、殺されるかのどちらかだ。

公定のレートがあるわけではないが、1人3000パーツ(約3万円)あれば、タイ軍が通してくれるという。そこで山中で知り合いになった2人の友人とアルバイトを始めた。1人の持っていたわずかな手持ちの金で、タイ領から中古の自転車を買ひ、それで荷物を運んで金をかせぐのだ。1回約5パーツ。当時のカンブチアには自動車はほとんどなく、自転車がタクシーとトラックの代わりだったという。

そうやって“資本”を稼ぎ、少しでも入りやすい難民キャンプに向かうため、ヘン・サムリン政権の支配する地域に戻ったりもした。そのために、カオイ

ダンキャンプに入るまで、3年もかかったわけだ。

KMさんによると、3年というのは、難民が到着するまでの期間としては、かなり長いほうということだ。

このあとも、日本に来るまでにも、幾つかの話はあるのだがそれは省略。結局のところ1984年1月1日、日本に上陸した。

勉強の邪魔になるからテレビはいらぬ

紙幅の関係で、話は突然現在のクットさんの話になる。クットさんは、工場のすぐ裏、北向きの4畳半に住んでいる。家賃はただではあるが、かなりヒドイ部屋であるという。8時から午後4時45分までが旋盤工としての仕事。12時から45分の昼休みには自炊する。仕事のあとは夜間中学に行き給食。学校のあと10時から午前1時くらいまで、毎日勉強する。

部屋にはテレビがない。テレビがあるとつい見ってしまうから、ないほうが良いと言う。24歳の彼に、ガールフレンドはいない。やがて結婚するにしてもいまはそのときではないと思っている。

今、気になっているのは、さし迫った夜間高校の受験と、そのあとの学校生活のこと。4年間の高校生活をまっとうできるだろうか？ そのあと大学に行けるだろうか…。そういった疑問、あるいは不安に答えてくれる人はいない。

月給15万円強、将来のために少しずつ貯金したいと思っている。だから、ムダ使いはできない。

「私、いくらむずかしくても、いまよりむずかしくても勉強しますね。夜間学校行きます。そういう気持ち、いつも持っています。毎日少しの言葉でもいい覚えたい…」

話はこのあとも続いた。将来への希望も聞いた。こんなにもひたむきで、こんなにも一生懸命の人に、私は会ったことがない。誰の悪口も言わない。グチもこぼさない。嘆くことはたくさんあるはずなのに。

しかし、その彼の行く手はなだらかではない。彼より早く来日して、見えない壁に苦しんでいる“まじめ”な難民がいることは私も聞いている。彼らのことも、このシリーズで伝えることがあると思う。

最後に、次のようなKMさんの言葉を紹介しておくのが、やはりフェアというものだろう。

「彼のように努力をし続けられる人は、決して多くはないの。たいていの難民は生活が安定すると同時に、異文化のなかで生きる目的を見失い、それ以上の努力を怠りがちになるの」

Dear, My Friend

出会ったこと、思うこと

考えさせられた本、映画……について

原稿、お待ちしております（1000字ぐらい）

ジミクリ3年 ボブ8年

カノウ タエ

無駄話その1、「ジミクリ3年ボブ8年」について

これは、既に有名な格言だけど（一部で……）、ジミー・クリフは3年聞いて分かる、ボブ・マレーは8年聞き込んで惚れる、といったような意味。そこで僕のレゲ体験だけど、まず高校の頃、兄貴がボブのLPを持っていた。一度ぐらい聞いたかも知れないけど、当時から極端な偏聴趣味で、プログレとBBジャズばかり聞いていた僕は、遠吠するような、ジャケットカバーの中のボブにさしたる感情も抱かなかった。う～ん愚鈍だったんだなあ。

その後大学のサークルからケニアへ来た時、友人と2人で行く先々、日本の童・民謡を武器に、歌合戦打入り大会を試みた。別に勝負がつくわけじゃないけど、僕らはずいぶん、あ、又負けた、と思ったものだ。なる程、「竹田の子守歌」も「夕焼け子守歌」に「赤とんぼ」も、情緒豊かな曲だけど、このアフリカの大地においては、繊細すぎて貧相な印象を受けてしまう。一方連中の方は、そののびやかな声で、悠悠と力強く、飾りけのない歌を歌いまくり、いかにも、その地の空気の色にぴったりなのも、僕らはずいぶん、不利だった。この時、こちらの名刀中、一番うけてたのが、「大漁節」。キクユランドの象旅館で賄いの姉さん達が教えてくれたのが、ジミー・クリフの“This world is not my home”だった。正確なタイトルを、僕は知らないけど、ジミーはこれを、キクユ語でも歌っている。彼女達のおおらかな歌声は、食堂の壁一面の、象のあくびにも似て、何てすてきだった事だろう。この時、僕は、ジミー・クリフを感じた。3年目だったか、どうか、定かでない。

そうしてボブについて。高校から数えて8年目、マラウイへ出掛ける準備期間中、再び彼のLPに、出会った。今度は、何かじわっとしみ込んでくるのを感じてしまった。レコードは、その頃、好きだった人が貸してくれたのだけど、別にその人から聞か

せてもらったからとも思えない、やはり、8年目だったからだろう。

何故か、その前後、僕のまわりにはレゲファンが大勢いた。2年間仕事をしていたマラウイなんて、ボブの名を知らないマラウイ人なんていないんじゃないかと思う程の気分でカリブの風とはいかないけれど、マラウイ湖畔の田舎酒場で曲をバックにビールを飲んで、やっぱり御機嫌だったな。

無駄話その2、エチオピア人の音楽感覚について

はっきりいって、この国の、彼らの音楽的センスに、僕は、げっそりだ。ラジオから流れ出る流行り歌ときたら、あれは、エチオピア版演歌だ、まったく。しっかりしたリズムの上ののった、あのアフリカン・ミュージック一般に魅せられて、こんな日本の裏側までやって来てる僕なんか、なんでこんな所に来てまで、日本のカラオケ・バックなんぞ聞かんなんねん、とも愚痴りたくなる。（何故か彼らはこの、カラオケ伴奏が大好きで、本当に、町のホテルで、〇×慕情だの、よっぴり！、なんて曲のバック・テープが流れてたりするんだ。カラオケ・ファンの皆さん、ご免なさい。）それでも近頃、少し馴れてしまって、聞こえてくると、ついこのエチオピア流行歌にも、あわせて口ずさんだりするようになったから、おぞましい話。

一方、伝統的な歌は、けっこういい。いいけど、ちっともアフリカンじゃない。あれは日本民謡だ。なにわ節だ。例えば楽器をとると、東西南（北はない）アフリカでは何よりまず打楽器がくる。ドラムがあれば、いつでも歌と踊りの輪ができる。ところが、エチオピアでは、これが太鼓でなく、弦楽器だ。もちろん太鼓もあるんだけど、むしろ弦楽器の方が発達しているみたいだ。特に、村の飲み屋なんかでは、流し、本当に流しのおじさんがいたりする。ギター一本こ脇にかかえ、煽歌うたって1ブル（百円）もらい、流れ流れて村から村へ……。ギターといっても、ローカルなもので、何種類かある。この辺りでよく見るのは、一弦の三味線風、マシニコで、これを馬のしっぽの弓で掻きならしながら、朗々と吟ずるように歌い—ここで又、驚ろいてしまうんだだけ

ど一客の方はこれを、じっと聞き入ってるリズム優先と旋律優先の差が、こんな所にも出る訳で、よそでは踊る為にこそ音楽はあるって感なのに、…ここはアフリカじゃないな。まあ、ハムの血が濃い彼らにとって、それも当然かも知れないけど。

無駄話その3、そしてまた、ボブについて。ついでに、エチオピアについて。

話がレゲからそれたけど、そんな彼らの音楽感覚も、まあ許せる、と僕が思ったのは、彼らも、又、国をあげてのボブファンだって事実からだ。

ファンであってもマニアじゃない為に、僕は知らずにいたのだけど、こんなことは、ボブ通には常識なのかも知れない、彼と、もしくはジャマイカと、エチオピアは、けっこう深い仲だ。彼は、この国で、コンサートを開いたこともあるんだそうだ。

その辺の事情は、彼の歌っている“ラス・タファリ…”の曲に明らかだろう。と、いっても、実は、歌詞版を持たない僕には、何度聞いても歌の意味がいまいち、わかりゃしない。そこで、これは、エチオピア人情報筋の伝に寄るところになるけど、まずラス・タファリというのは、高名な旧エチオピア皇帝、ハイラ＝セラシェの、摂政時代の旧名で、これは彼のことを歌った歌だ。

十数年前、この皇帝がジャマイカを訪問した折、この地は、既に10年来の大干ばつがさなかにあった。しかし、どうした偶然か必然か、この僻地の皇帝がジャマイカの地に足を降ろしたその日、大雨が降った。当然人々は大喜び。訪問期間中、あちこちの人垣から、雨をもたらした彼を称える歌声が絶えることなく続いたそうだ。この時から、そして今に至るまで、ジャマイカの人々は、ハイラ＝セラシェを神格化して崇めている。先の曲は、ボブ・マレーが、

この時、人々の歌った賛歌を集めて来て、仕上げたものだそうだ。しかし、他国においては雨をもたらした、神と敬われたthe 皇帝が、自国においては干ばつ難より、その神聖を奪われたなんて、随分皮肉な話だなあ。

まあ、そんなこんなで両国は仲が良い。前皇帝を称えた歌も、未だ発禁にはなっていない。エチオピア国南方シャジャメナ郡クイエラには、皇帝がジャマイカ人に与えた豊かな土地があり、今でも数十人のジャマイカン・ミッションが、残って暮らしていると聞く。

もうひとつ、ジャマイカ人は、エチオピア人を、自分達の祖先と信じているそうだ。確かに、並ぶと膚の色など似てるけど、本当かな。例えば、こんな具合だ。一昨年初め、ジャマイカは、西独でEXPO'を開いた。その一画に、1つは、ハイラ＝セラシェの画像、もう1つは、天使の如く翼をつけた、エチオピア女性の絵が、掲げられていた。ラジオインタビューに答え、ジャマイカ人の曰く、ハイラ＝セラシェは、雨をもたらしてくれた神、エチオピアは我らが祖先の地、と説明したそうだ。彼らにとって、歴史的、人類学的考証なんて、いらぬお世話なんだろうな。もうひとつ、おかしいことにこの時、皇帝は信じて、彼を廃した現エチオピアは信ずるなかれといったそうだ。

こんな所が、エ・ジャ関係のお話し。ボブ・マレーが、いつ頃ここでコンサートを持ったのか知らないけど、どんな思いでステージに立ったんだろう。僕も聞きに来たかった。エチオピア人の方にも、ジャマイカと聞くとFRIENDLYな印象があるそうだ。先日もパーティーの席でテーブルをかけると、一同、あ、ボブだ、と目を輝せていた。やっぱり彼らもHAPPYなアフリカ人なのかな。ともかく、ボブ・マレー万歳！

最近よんだ本

魂に触れるアジア

松井やより 著

朝日新聞社 1200円

書店でこの本を手にとった第一印象は、なんと大げさな名前の本なのだろうかというものであった。ところが一章一章読み進むうちに著者の思いが切々と伝わってきて、この題名がいつわりではないことがわかってきた。著者は常に女性として弱者の側から事実を見ようとしている。そしてそれも単なる事実の羅列ではなく、自分自身も深くそれらの人々や運動にかかわろうとしている。

この本を読むといかに自分がアジアについて無知であるかがわかる。最後に著者もいっているように私たちが知りうるアジアの情報はあまりに少ない。劇的なフィリ

ピンの政権交代劇でもない限りフィリピンのでき事が人々の関心を集めることはほとんどないだろう。

この本によって今まであまり報道されることがなかったふつうの人々の闘いを知ることができる。

体を張って自分たちの森を守ろうとする女たちの運動は日本の自然保護運動など吹きとんでしまうほど迫力がある。またグローバルな視野を持ったマレーシアの消費者運動や紅茶をスリランカから直輸入しているオーストラリアやニュージーランドの市民団体の話など、国内で同じような活動をしている人にとって参考になることも多い。

2月の動き

●ソマリア一行く人、去る人、帰る人

2月8日、ソマリアで基礎医療担当している榎田さんが帰国した。一年ぶりの帰国である。茶色に陽焼けし、荷物一つで事務所に現われた格好は、スキー帰りのようである。しかし、話をしていくうちに、やはりまだ時差が残っているように思われた。「スペースシャトルが落ちたんですって!」「ああ、落ちたんじゃなく爆発したんですか」「持っていたラジオから聞いたニュースを、難民が教えてくれたんですよ」といった具合である。思わず一週間前に、VTRで朝から晩まで、それも何分の一秒まで分析された映像を見続けていたことを思い出した。この違いは、社会による情報量、技術力の差と捉えられるのかもしれないが、社会にとっての興味や必要性の差という方が、実情に近いのではないだろうか。

さて、榎田さんと入れ替わりに、農大生の五十嵐君、井本君、山口さんの三名が、ソマリア入りをした。2～3月は砂嵐が吹き、暑さと乾燥で、一番過酷な時期だそうである。農場の拡大、植林などを進めていく、と張切って出発した。五十嵐君は2人が4月に帰国した後も、ソマリアに残り、農場建設にあたる。

しかし、キャンプでは小雨期に雨が降らなかったので流れによどみができ、マラリアが発生した。日本人スタッフ二名がマラリアにかかっただけでなく、1月末よりコレラも再発したと聞く。新しく参加したボランティアのみならず、引き続き現地で働いている人達も、自分の健康は自分で管理していくという基本を忘れずに、しっかり頑張ってください。

なお2年間ソマリア農場で農民たちと苦業を共にした高橋さんが2月17日ソマリアを離れた。高橋さん、長い間御苦労様でした。

●「忘れないで、カンブチア国境の人々の声」

タイ・カンブチア国境で食料配給や栄養指導にあっていた浜野敏子さんが、一年半ぶりに帰国した。2月20日には「忘れないで、カンブチア国境の人々の声」と題し、JVC東京事務所で開催された。浜野さんは1984年11月のベトナム大乾期攻勢以前から国境のノンチャン村に入り、砲火を逃れて

移動する人々の中で働いてきた。キャンプでは、今でも常に無線ラジオを携帯し、毎日流される情報を聞いて逃げる用意をするという。しかし逃げることのできるのはボランティアだけだ。難民たちは「大丈夫、大丈夫」と笑ってすますか、「ここにいるしかしょうがない」とあきらめるかのどちらかである。浜野さんは、自分たちは逃げようとすればいつでも逃げる外から入ってきた人間であり、彼らとの越えられない壁をつくづく感じたという。

しかし「多くのクメールの人たちに会えたことは幸せだった」「1年半働いて、彼らのことがわかっていないなということがわかった」ともいう。「とにかく彼らのことを忘れないでほしい。そしてわれわれの日常そのものを問うてほしい」という浜野さんの言葉が心に残る。

●熱気あふれた執行委員会

まだ大雪のあとがあちこちに残っていた2月24日、第11回執行委員会



がJVC東京事務所で開催された。今回はタイからバンコクのスラムで活動している、ウティパンさん、ヴェラナットさん、バンコク事務所から中山さんが参加した。また一時帰国しているソマリアのスタッフや、この1月までエチオピアで働いていたスタッフも加わり、いつにない盛り上がりを見せた。

まずタイの体制について話し合われ、東京と現場との連絡を密にするためタイに代表を置くことは廃止されることになった。今後バンコク事務所では各プロジェクトの調整と渉外、広報のみ行う。活動内容については各現場の自主性に任される。

その後、各プロジェクトの説明・報告が続き、時間をオーバーして熱心に討議が続けられた。最後に岩崎代表の「JVCも6年目を迎えた。ボランティアは慢心することなく、活動がマンネリ化しないように気を配りつつ新たな気持ちでやっつけよう」という挨拶で閉めくくった。

お知らせ

☒ ボランティア募集

本年、8月27日から9月5日にかけて、国際社会福祉会議が東京で開催される。この会議は2年に1回開催され、日本では昭和33年に開催して以来約30年ぶりのものである。世界各国から1500人もの社会福祉関係者が来日するため、全国社会福祉協議会ではこの運営にご協力していただくボランティアを募集している。

<応募資格要件>

① 8月27日から9月5日までの会議期間において、おおむね5日間以上の参加が可能な方。ただし、語学ボランティアについては、8月30日、31日のみ参加でも可。

② 事前の研修(2カ月に1回程度を予定)に参加可能な方。

③ 会議期間中、自宅等から通える方。

<ボランティアの役割>

① 一般ボランティア — 接待、会議進行補助、サービスセンターにおける会議参加者の各種ニーズへの対応、会議運営の事務など。

② 語学ボランティア — 施設見学時の通訳、会議に関わる諸文書の翻訳、レセプション時などの参加者同志の交流のための通訳 など。

<募集人数>

① 一般ボランティア(要日常英会話) — 約60人

② 語学ボランティア — 約60人

4月10日までに下記にはがきでお申し込み下さい。

全社協・全国ボランティア活動振興センター
〒100 千代田区永田町2-12-4 山王飯店ビル
Tel 03(581)4655

☒ 講演会 「カンブチアは今……」

— 傷ついた微笑の国 —

日 時 4月4日(金) PM 6:30~8:45
講 師 熊岡路矢 (JVCカンブチア代表)
場 所 市ヶ谷 YWCA tel 03(264)0661
主 催 大竹財団
会 費 ¥500.-

* 今月よりこのページを担当することになりました。JVCに関わってまだ半年余りです。全体像がやっとつかみかけたところですが、かえって事務所に余り来れない人の知りたいこと、興味を持ちそうなことが、見える位置にしているのではないかと思います。おかしなところも多く出てくるかもしれませんが、素人の感覚で聞いたこと、見たことを載せたいと思いますので、どうぞよろしく。 吉武保子

● 法律の研修会が始まります

日本語家庭教師プロジェクトは活動を始めてから今年の4月で丸二年を迎える。規模が大きくなるにつれて、活動に関わるボランティア同志の意識の違い、JVCに対する捉え方の違いなど様々なギャップが目立ち始めてきた。また定住者に日本語や生活の指導をするだけでは、彼らが抱えている問題を何ら理解できないことにジレンマも覚えている。

そこで今はプロジェクトの見直しを図っている。一つの試みは、4月から月一回、弁護士の佐藤安信氏を囲み、法律の側面から定住者の問題を考えようというものである。「生活保護を打ち切られて困っている」「雇用促進住宅から出てくれと言われた」「収入の面で差別があるようだが……」などの具体的な悩みに対し、法律的に対処するにはどうしたらいいかアドバイスを受け、問題解決について考える。

日本定住者の国民(厚生)年金について

昭和36年4月1日以降日本に定住した人は、その日から25年という考え方で計算する。25年に満たない人にはカラ期間を認めて受給権は取得させるが、納付期間によって年金額を計算する。かけ捨てはあり得ない。また自分の祖国に帰っても受給できる。ただし国民年金も厚生年金も1年以上の期間(両方合せてもよい)を納付しなければならない。それ以下の期間しか納付できなかった場合は、一時金として全額+αを返還される。(αは国、または会社が負担する)これは本人が60才になった時点で申請しなければならない。

老齢年金は、原則として、保険料納付済期間、保険料納付済期間と保険料免除期間とを合算した期間または保険料免除期間が25年以上ある人が65歳に達したときに支給される。しかし、国民年金が満了した当時31歳以上であった人(1930年4月1日以前に生まれた人)は60歳までに25年間の資格期間を満たすことが必要である。

(今年の4月から年金法が改正されるので、定住者もカラ期間を計算し、老齢年金をもらえるようになる)

JVCプロジェクト

1986年2月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。</p> <p>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時 勉強会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	<p>岩崎駿介(代表)</p> <p>星野昌子(事務局長)</p> <p>熊岡路矢, 柴田久史 佐々木志保, 荻野美智子 前川昌代, 佐久間典子 古西 勇, 他15人</p>
日本国内	<p>●日本語家庭教師</p> <p>東京, 埼玉, 神奈川, 千葉, 山梨に定住している難民の家庭を訪問して日本語及び生活の指導。神奈川県大和市の日本語教室は, 10月中旬より始まった第4期を続けている。運営委員会を新たに発足した。3年目の活動の評価を行なうために, 12月いっぱいボランティア募集を休止し, 評価のための話し合いをしている。</p> <p>インドシナ以外のイラン, アフガニスタン難民も対象に活動している。機関誌の『そんぼっと』(クメール語で“手紙”の意)を毎月発行している。</p>	<p>(財)アジア福祉教育財団・難民事業本部 神奈川県福祉部 禅林寺</p>	<p>森山久寿子 地区連絡係11人 他約70人</p>
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進</p> <p>農民が自主的に養蜂を始めた。 ジュバ川の水位低下にともない表出した中州を農場として利用する試みを始めた。灌漑も肥料も不要なこの農法は規模が小さいものの興味深い。</p> <p>●補助給食/基礎医療</p> <p>難民移動に伴い, JVCの活動地もマグドールとジャボレ(プロブルティ改め)と2カ所になる。マグドールでは再びコレラが発生したためジャボレへの難民移送は中止している。現在3回目の難民移送が終了し, ジャボレの難民数は3500人となった。全般的に難民の健康状態は良好であるが, コレラはここでも発生し, 警戒体制をしいている。医療施設建設はすべて終了した。(ジャボレ)</p> <p>●植林</p> <p>木の苗をルークの農場から運び, ジャボレの宿舍及び医療施設のまわりで植林を始めた。</p>	<p>UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 朝日新聞厚生文化事業団 仏国土をつくろう会 創価学会 ジャパン・タイムズ</p>	<p>税田芳三(ソマリア事務所長), 嶋 紀晶, 山口誠史 久保祐輔, 鶴田三芳 中川正憲, 荻ノ迫善六 柿原建三, 五十嵐裕昌 井本勝幸, 山口博子 J・バークマン, モハメッド, ラシッド, アオキ, アハメッド, シアッド, ソフィア, シェイクアブ ディ, ミーレル 掛村 均, 樫田秀樹 米澤 聡, 石井弘代 中路美和子, 山科 司 千田悦子, シュクリ ハッサン, アブディ フセイン</p>
エチオピア アジバール (ウォロ州)	<p>●緊急医療/入院患者への治療のための給食</p> <p>1月末に医療施設の閉鎖を完了した。閉鎖にあたり2人の入院患者をテナの保健省のヘルスセンターへ移したので, 水道管, 窓用ガラスなどの病院資材をヘルスセンターに供与した。(日本円で10万円位)</p> <p>●総合的復興促進</p> <p>プロジェクトの視察, 計画立案のため, エチオピア難民復興委員会, 地区行政官, 農業協同組合と交渉中。農業技術者の伊藤達雄, 幸子夫妻がプロジェクトに加わり, 予定の日本人スタッフが全員そろった。</p>	<p>朝日新聞厚生文化事業団 立正佼成会 神奈川県 ユニセフ・エチオピア CRDA BAND-AID 西本願寺</p>	<p>内山田 康, 林 達雄 伊藤達男, 伊藤幸子 内藤のぞみ</p>

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等。 季刊『ニューズ・レター』(英語・タイ語)発行 バンビーノ幼稚園(2月15日)と日本人会(2月22日)でバザーを開催した。	全国社会福祉協議会 一般寄付	佐藤正喜, 中山清秋 ボンピモン・チャイブーン カモン・ミンムアン 斎藤美香代 他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 カオイダン技術学校に加え, カオイダン アネックス(カオイダンに新しく到着し, 昨年9月に登録されたカンブチア人のためのキャンプ)においても技術学校の設立をするため, タイ政府やUNHCRと交渉を進めている。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 妙心寺派事務所 花園会	常田正行, 熊木政江 トンディー・ソムカネ ソムヨット・ラタナタム
タイ・カンブチア 国境 (カンブチア 難民村)	●レントゲン移動診療 1985年12月31日でタイのCOERRという団体に活動を引き継いだ。診療器具, 機材はUNBROを通してCOERRに寄贈され, 担当者はCOERRで活動を継続している。 ●補助給食 新配給センターはカンブチア人の活動者が主体となって運営している。今後もカンブチア人の自治組織などともより密接に協力活動をする。		
パナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ①日本語の日常会話の習得 ②日本に関する概略的な情報伝達 ③日本へ行くまでの手続き等の理解を深める	天理教千葉	浜崎妙子 ティアン・パントゥー
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム地区定住児童が小学校を卒業できるよう学費を援助している。来年度の対象者は250名。 ●クロントイ図書館 1~12区周辺の居住者, 学齢未満の児童, 小学校を中退した児童, 青少年を対象にしている。 ●移動図書 10のスラム地区に子供向け図書を中心に貸し出している。少なくとも対象者は約2000家族になる。 ●移動学習センター 9のスラム地区で学習の機会のない子供たちのために人形劇などで教育を行っている。 ●再定住援助 スラムを立ち退かされる人達がラック・バーン地区に再定住し, 新しい生活共同体を作るため支援する。	モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 YMCA横浜 聖ヨゼフ老人ホーム	ヴェラナット・ドゥアンウドム サムルエイ・ジョンヨークラン アルニー・プロマ ウティバン・ラタナタリー
カンブチア (ブノンベン)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 ①孤児院の老朽化した宿舎の補修, ②OXFAMとの共同による井戸掘り, ③救援のためのワークショップ/技術学校等の援助計画を立案した。	(協力団体) ユニセフ・ブノンベン事務所	熊岡路矢, 簗田健一
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (パターン・プロセス シング・センター)	●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務	城西病院	青井千恵

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員
 - 一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 - 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

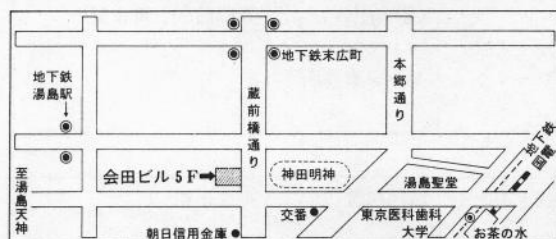
▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (2月小計 460,662円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (2月小計 3,500円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (2月小計 106,700円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (2月小計 3,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. デッグ・スラム奨学金募金 (2月小計 107,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (2月小計 0円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (2月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (2月小計 3,000円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (2月小計 52,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (2月小計 173,220円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
 加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶今年も中国残留孤児(もっと適切な表現はないかと思うのだが)が来日し、肉親探しが行われていた。肉親とめぐりあった喜びも束の間、日本への帰国後は言葉の問題をはじめとして様々な困難が待ちうけることになる。彼らの肉親探しやアフターケアには厚生省が当たっている。それに対し定住難民やポートピープルに関しては外務省が担当である。お互いに日本の生活に不自由を感じながら両者を直接につなぐものではなく、ボランティアの個人的なネットワークに頼っている。たとえば日本語の家庭教師活動にしても特別な交流や情報交換はできていない。日本にも援助のための官庁を、という声も聞くがまだ先のはなしか。



昭和61年3月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 電話03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J
 バンコク事務所 JVC THAILAND
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, THAILAND
 電話(286)4857
 Telex:87032 COMSERV TH
 ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadishu, SOMALIA
 Telex:794 HICOMREF SM
 エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA
 c/o Embassy of Japan P.O. Box
 5650 Addis Ababa, ETHIOPIA
 印刷所 (株)ベスト・プリンティング
 ＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円